

西水 美恵子

にしみず・みえこ=75年ジョンズ・ホプキンス大学院卒、プリンストン大経済学助教授を経て、世銀副総裁。退任後、シンクタンク・ソフィアバンクのパートナーなどを務める。



本物のリーダーには揺るがぬ信念がある。恩師と仰ぐ雷龍王四世(ブータン前国王・10月9

日付本欄参照)も例外ではないが、王の学友だった某大臣は「陛下の信念は昔からさかさま」と笑う。貧しい民を想い、丸太小屋に住む。暖をとれない民を案じ、真冬も火の気なしの生活。国民の幸せは役所別になど区切られていないと、横割り行政を重視。草の根から遠い政治は即ち悪政と、地方分権制度を確立。「指導者を資格ではなく生まれで選ぶ王制は危ない」と政治改革を先導し、昨年(08)の総選挙で民主政権が成立した。王の「さかさま」信念に触れたからこそ、中央集権型の世銀営業組織をひっくり返す決心がついた。

ウェブ 時評 2009.11.10

ブータンの王制は一昨年100周年を迎えたが、その半分以上は民主化改革の歴史だった。始まりは、先々代雷龍王三世が1953年に設立した国会(無政党)だった。四世は、その経験に基づき県と市町村に地方自治体を置き、エリート中のエリート国家公務員を選び、すくなく全国20県に配置した。国民の根本的な意識改革だからと、

はいけないと説く。経済成長自体が国家目標であってはならない。目標はただひとつ、国民の幸せに尽きる。成長は幸せを求める為にあるひとつの重要手段なのだ。故に政治と行政は「社会経済発展に関する全ての努力の中心に人間を置くべき」と位置づけ、富の増加は幸福に直結しないと論ず。「幸せへの鍵は、人間が必要とする

「人間の住む国の成長ではない」と断言する。この声明を読んだ時、泣いた。その一行一行に、離村ホームステイで世話になったアバ(父)とアマ(母)の声を聞いた。あの村の人々の強い自助自立精神が、確かに脈打っているのを感じた。部下全員が嬉々として描いてくれた「夢みる世銀」ビジョンを見

担当局長を現地在留とし、業務全権を譲った。さかさまのビジョンは、改革を楽しい学習の道に変えた。間違いは学習の糧となり、痛みも皆で共有する日々だった。雷龍王五世に受け継がれたさかさまの信念は、夏の国会閉会の辞で、政治よ書るなかれと轟いた。「民家に座り、食事を共にし、民の抱負を語りあう時が、私の最も満たされる時間だ。国民が抱える問題を自分で見て知ることになる術はない。国務に勤む時、尽くすべき民の顔を思い出し、どうすれば彼らに最も良く仕えることができるのかを知るからだ……」

雷龍王の教え さかさまの力

数十年を自治体育成に費やした。ブータン計画省が1999年に発表した「ブータン・2020」は、王の努力の賜物だった。全国草の根の自治体が議論を重ね、国家ビジョンとして編み上げられた声明だ。この声明ほど国民総幸福量という公共政策哲学を明確にした書面は、他にない。声明は、目的と手段を混同して

ある程度の消費満足と、非物的満足感、特に情緒や、感情、精神的な満足にある」から、経済開発戦略は、物的な次元と非物的な次元のバランスを保つ中道にあるべきだと主張する。幸福を可能にする自然環境、精神的な文明、文化伝統、歴史遺産等を破壊し、その上家族や友人、地域社会の絆までも犠牲にする様な経済成長は

た時にも、同じ感動があった。一枚の絵が、ビジョンに沿う組織の形を現していた。点線の円になった部局が重なり合う透過性の高い組織は、透明な葡萄の房のようだった。底辺に、葡萄を支え上げる「ミエコ」がいた。そのさかさまが無上(無上)に嬉しく、また泣いた。世界銀行を草の根に近づける組織改革が始まった。南アジア各国

我が国も、ようやくその学習の道を歩き始めた。